



記事

- ♪ 巻頭言
- ♪ 体育哲学考
- ♪ 私の研究
- ♪ 日本体育学会キーノートレクチャー
- ♪ 浅田学術奨励賞・受賞記念講演
- ♪ 平成 25 年度浅田学術奨励賞受賞報告
- ♪ 学会参加リポート
- ♪ 運営委員会からのお知らせ
- ♪ 第 2 回定例研究会のお知らせ
- ♪ 次号予告

巻頭言

「モデル」の再定義は可能か.

山口 順子（津田塾大学）

先月、最寄り駅で朝日新聞の号外に出会った。何ごとかと目を凝らすと「ソニー、真っ向勝負」、<ソニーの総力を結集>、「カメラからスマホを再定義」と宣言～、などの文字が立ちあがった。次々と登場するモデル、それに伴う開発競争、そしてターゲットの多様化一。カメラ技術の現場では、「魅力的な新型モデルの開発に向けてメーカーの総合力が、今問われている」とあった。

この号外広告をみて思い出したことがある。ひと昔前、「研究とはモデルの提示である。」とスポーツ心理学の論文を書いている友人がつぶやいていた。その時はなるほどと思いながら、どんなモデルにまとめたのか聴く機会もなく月日が過ぎていた。

技術メーカーが対象とする製品開発と身体教育の哲学モデルのねらいはもちろん異なる。一方は、最先端のすぐれた性能や新型見本の提示で、アイデア開発が勝負である。他方、活動する人間を対象とする身体教育やスポーツ哲学領域にも手本や模範となる優劣判定の概念モデルもあるだろう。しかし当該領域が求める本質を示す哲学的な概念モデルとはどのようなものだろうか。

今年の 9 月 4 日 - 8 日に開催された国際スポーツ哲学会（IAPS : International Association for the Philosophy of Sport Conference）の発表にあった、スポーツの多様な「定義」ともいえる概念モデルがいま脳裏に浮かんでくる。

ちなみに、2013 年 IAPS の第 41 回大会は、北米カリフォルニア州立大学フラートン校で行われた。抄録集には発表数 118 件が掲載されているので、100 件を超す研究発表が世界中から集まったことになる。今年は会場がメキシコにも近いカリフォルニア州ということで、スペイン語、ポルトガル語、イタリア語などが集まるセッションも用意されていた。発表は 4 - 5 カ所の会場で、同時並行で実施された。日本からの発表件数は、全体の一角にあたる 10 数件、参加者は 20 名程度だった。これは最近の平均に近い。

スポーツについての哲学モデルは、ペンシルバニア州立大の R. Scott Kretchmar 氏 (Penn State University) の発表の中で展開された。プレゼンテーションでは、慣行としてのスポーツとその本質特性とのあいだにどんな概念モデルが位置づくのか。一方に、Simon, Russell and Dixon, 氏ら、他方に Morgan 氏の、多様な「イズム：主義」を表象する言説をとりあげての解釈学的な論義であった。氏のアプローチは、人間が生物学的存在（生命体）で

あることから、人類の進化論的な歴史を射程に据えての哲学的 (philosophical anthropology) 検討であり、Formalist-interpretivist-conventionalist の枠組みから整理した結果、スポーツについて、次の6つのモデルを提起した。

1. 卓越・成就の哲学モデル (achievement model), 2. 発見・偶然のプレイモデル (serendipity model), 3. 気づき・認識論のモデル (epistemological model), 4. ドラマなどの美学モデル (aesthetic model), 5. 自己表現などの実存哲学モデル (existential model), 6. 帰属・公共の哲学モデル (communitarian model) である。

これら6つのモデルの一つひとつにどんな解釈を盛り込んだのかは十分にフォローできず、よく理解できなかったが、Kretchmar 氏の結論は、人類の進化論的な流れ (たとえばプレイの進化論) に沿いつつ、多次元に広がる文化的現実によって、多様な概念モデルが見られることは、スポーツにはそれだけたくさんの貢献可能性があることだ、と要点をまとめた。

今日、多様な概念をもつスポーツの世界は混沌としている、と言うこともできるが、さまざまな類型化を通して、さまざまな社会貢献ができると評価したプレゼンテーションの帰結は、積極的で明るい印象であった。しかし同時に、筆者の中から生まれた疑問は、多様な概念モデルがあるということは、それだけ多様な規範があるということにつながるから、明るい評価だけではすまないのではないかという危惧である。隣の人を知らないグローバル社会の中で、個人で解決するウエイトが大きくなっている現実をどう受けとめ、どう理解・判断するのか。自己責任という名の下に、弱い立場が切り捨てられていくのではないか。弱者への配慮がなくならないような着陸点を忘れてはならないと思う。

そこで、スポーツ科学を専攻する学生たちに、スポーツにはどんな概念モデルが可能かと尋ねてみた・・・思いつくままにと条件をつけ、さらに、身近なところで・・・と声をかけると、教育モデル、ビジネスモデル、生涯学習モデル、健康モデルなどがつぎつぎあがってきた。ところがこれらは、スポーツ概念の適用される範囲 (外延) を抽出したものとも言えるので、つぎに、それらの外延モデルに共通しているスポーツの本質特性 (内包) を考えることが必要になる。即ち、実存哲学モデル、認識論モデル、美学モデル、プレイの哲学モデルなどに結びついた具体的な説明、あるいは個々の定義の検討が次に気になるところである。

世界の身体教育やスポーツ哲学には、すぐれたカメラ製品のような最新型モデルはない。それよりも、科学技術のめざましい進展と調和しながら、人間的な自由を求めて、生涯にわたって社会や仕事に参画し生活していくことのできる、多様な生き方を哲学する概念モデルが、いま問われている。

山口 順子 (june_yam@tsuda.ac.jp)

体育哲学考

体育原論を学んで

森 知高 (福島大学)

私がこの関連の勉強に加わらせていただいたときの研究室の名称は、「体育原論」だったと記憶しています。その頃、前川峯夫先生から (これも直接的にか、間接的にも記憶が定かではありませんが) 「まだ (体育) 原理とは言えない。原論としてなら語るができる」と言った趣旨のお話を伺いました。すなわち、体育の原 (みなもと) の理 (ことわり) は言えないが、(理屈を) 論ずることはできる位置なんだと解釈しました。以後も自分は体育原論の勉強をしていたのだと思っています。

その後、ある学会のシンポジウムで司会を勤めたことがありました。テーマに「哲学する」とかの言葉が入っていました。フロアのいわゆる大先生から、あなたには哲学がないと言わ

れた記憶が鮮明です。たしかに私は根無し草です。何かの考えに触れるたびに、そちらへフラフラ、あちらへフラフラ、そのときの気分次第で漂っています。

私の信念（ビリーフです）は「経験に悪い経験はない」という勝手なものです。あちらへフラフラ、こちらへフラフラしているうちに何かにぶつかっています。成功もあれば失敗もあります。一喜一憂もしますが、私なりにこの成り行きと結果を捉え直し自分の理屈（私なりの論）を作り直しています。

そうこうしているうちに、勤務する大学で研究科を立ち上げることになりました。設置に必要な資格を持つ教員をそろえ、大学院はスタートしましたが、体育科教育（必置科目）担当者が定年になりました。この科目のプロパーでの教授はなかなか探せません。そこで私のフラフラ具合が何とか役に立ちました。何本かの論文が体育科教育として認められたのです。というわけで、現在の私は体育科教育専門ということになっています。

体育科教育の世界に入って感じることは、（失礼ですが）「原（みなもと）の追求が薄いな」ということです。確かに実践現場で即座に役立つ教材や方法は必要です。そしてそれを展開していく手腕が求められています。また、同時に実践の成果（今様に言えばエビデンスでしょうか）も問われています。そのために、この要望に応ずるための研究も効率的でかつ客観性を問うものとなっていきます。実証的成果に目が行きがちです。体育原論的思考の私には違和感がでてきます。「何のために」「どうする」そして「どうなった」の「何のために」にどうしても立ち位置をおいてしまいますから。

どうか体育哲学関係のみなさま、積極的に体育科教育の世界に「何のため」の理をぶつけて下さい。そこに体育としての理論と実践の融合が生じてくると思います。

平成 23 年 3 月 11 日の東日本大震災で、福島県民はおおきな災難に見舞われています。この被災者への支援を行うため福島大学では、「うつくしまふくしま未来支援センター」を立ち上げました。私は、本センターの「こども若者支援部門」の部門長を命じられました。力不足ながらこども支援のための諸活動に取り組んでいます。その活動を原論的思考の私が考えた時、これからのこどもの支援に必要なことは「継続性」「個別性」「専門性」をもって活動していくこととなりました。一過性でなく、一人一人のこどもの状況に即し、将来を見通した、深い見地からの支援が必要です。体育関係者からの専門的・継続的支援をお願いいたします。

森 知高 (mori@educ.fukushima-u.ac.jp)

私の研究

「身体の動きから何を学ぶか—舞踊家、ボディワーカー の用語法を手がかりに—」

福本 まあや（富山大学）

私は大学で舞踊教育を専攻し、学部卒業後フリーで舞踊活動を始めました。創作と上演の活動をしばらく続け 1998 年に大学院に戻りました。そこで、コンタクト・インプロヴィゼーションというダンスの即興の形式の系譜や原理を問う研究を行いました。学位取得後は、この研究に残された課題と現職の教育担当内容（美術工芸系学生への一般体育の指導）からの共通の関心として、日本と米国のボディワークを対象に「身体の動きから何を学ぶか」というテーマで研究を行っています。ボディワークとはカテゴリーの名称で、そこにはフェルデンクライス・メソッドや野口体操等、身体の調整や運動パターンの再教育をねらいとする思

想と実践の体系が含まれます。「体ほぐしの運動」とも関係が深く、現在の研究はその基礎理論を再考する研究でもあります。

本欄執筆の機会を頂き、自分の研究のどの側面について書くべきか迷いました。現在の研究は学会等で発表させて頂く機会もありますので、ここでは大学院（1998-2008）での研究対象であったコンタクト・インプロヴィゼーションについて紹介させて頂きます。

コンタクト・インプロヴィゼーションは、米国の舞踊家 S. パクストンが 1972 年に考案したもので、背景にはパクストン自身の合気道や器械体操等の経験と、同時代の前衛舞踊家らとの交流があります。この形式は「接触を通して可能となるコミュニケーションの探求」として始められました。ともに踊る他者と身体の接触を継続させながら、そこに生じる自然発生的な流れにのって自由に動くというものです。パクストンらは「誰もが指導してよい」という方針をとり、一方で *Contact Quarterly* 誌や合同ワークショップを通して、この形式の指導や学習の経験や、関連領域についての情報の共有を重視しました。その結果、技術は飛躍的に普及発展し、欧米のコンテンポラリーダンス隆盛の一因を担うとともに、従来の劇場舞踊とは異なる文脈（コミュニティアートやセラピー等）に展開しました。

私がこの形式に初めて出会った時、それ以前に経験していた舞踏の訓練（野口体操を取り入れていたもの）とこの形式の訓練内容が似通っていたことに驚きました。両者とも、床に横たわり、ゆっくりと自身の身体を内側から観察し、重さの感覚を感じながら探求的に動くことを重視します。日本と米国で前衛舞踊として生じたダンスが、外観としては全く異なる美意識を呈しつつも、身体の内側を観察し「脱力」の訓練を行っていた点に関心を持ちました。研究の主な方法は、指導クラスへの参与観察、その受講者への質問紙調査、指導者やパクストン本人へのインタビュー、それから *Contact Quarterly* 誌(1975-1995)にあるパクストンを始めとする実践者らの記事を対象としたディスコース分析でした。

研究を進める中で、「脱力」を重視する導入部は、パクストン自身の当初の試みにあつたものではなく、考案初期と一緒に活動していた M. フルカーソンによるリリースワークの影響だということが分かりました。また複数の指導者の事例を検討する中で、多くの場合、導入部はその指導者のボディワーク歴と関係していることが分かってきました。また、「脱力」と私が捉えた内容は、単に力をぬくことではなく、その部位の重さの感覚に気づいていることであり、相手や物理的な力に動かされ得る状態にいることと分かってきました。つまり、この形式では相手との接触点で生じる情報すなわち力がやりとりされるわけですから、相手の力を正確に読み取りつつ、同時に自分が発信している力に気づいていることが必要です。この力は「方向付けられた重さ」と言い換えられるでしょう。ボディワークが、その重さへの気づきを促す手法と観察力を支える知識や訓練法を提供していたのです。

一方、形式につながるパクストンの問題意識としては、伝統的なダンスの動きの外側に広がる動きの可能性への関心や、ダンスという芸術に特有の運動感覚の探求への欲求が見られます。彼が合気道の手刀の動きに関心をもち熱心に学んだのも、そうした理由でした。集団で特定の主題も定めずに自由に即興で上演することは、既に 1960 年代後半から試みられていました。が、彼はその自由であるはずの即興が踊り手のエゴのぶつかり合いになり、自らの「ペルソナ」に囚われる状況に問題を感じていました。そこで彼は「接触を通してのコミュニケーションの探求」を始めました。この探求は、どのように動こうかと考えてしまう「心の動き」を封じるための策でもありました。運動に先行するイメージ(フィードフォワード)を最小にして、反射の動きを能動的に経験する可能性を開いたのです。

現在の「身体の動きから何を学ぶか」というテーマは、この形式を研究する中で散見された実践者の言及にも影響されています。複数の実践者が、この形式の魅力は、心身、そして自他の関係についての多くのメタファーを体験的に学ぶ点だと述べているからです。つまり、ただ他者と向かい合い動かし動かされる経験は、心身の分かち難いつながりや自他の境界、

そして伝達とは何かを気づかせてくれるというのです。

急激な変化を遂げる現代において体育を考えると、旧来の語彙では捉える事が出来ない学習者の様々な経験の位相を考える必要があると思います。私はその一つの方法として、自らの動きの探求を続ける舞踊家やボディワーク考案者らの語彙—解剖学や神経科学の語彙も含まれてくる—を明らかにすることで、運動学習の経験の位相を明らかにしてゆきたいと考えています。

福本 まあや (fukumoto@tad.u-toyama.ac.jp)

第 64 回日本体育学会

キーノートレクチャー

ヒューマニスティック体育論の系譜

井上 誠治 (国士舘大学)

アメリカ体育哲学の系譜は、1930～50年代に多くの大学で大学院課程が設置され、修士・博士の学位が授与され始めたことを出発点とする。当時の中心的指導者が学位を取得し、他の専門領域との連携を図る中で、体育はその学問的基盤を確立してきたのである。当該領域における学問的研究の動向は、当然ながら学位取得のプロセスと深く関わってきた。そして1960年代以降、体育の学問化運動の余波を受け、体育哲学もまたそのためのスタンスを自己主張しつつ、体育の理念的対象として「哲学と体育プログラム」及び「学問としての体育」の二つの論拠を探ることへとその研究の関心をシフトすることとなる。とりわけ後者の論拠を巡る議論の中で、後の名称論争 (naming debate) とも呼応しつつ、その知識対象として「the art and science of human movement」の概念が採用された事実は、「human」に力点を置く体育哲学の一つの潮流を生み出す契機となったのである。

このような学問的研究の進展は、各大学の研究者とその思想を継承する者との間での知識の交換によって為されてきた。その潮流にあって、プラグマティズムの延長線上に実存哲学や現象学を捉えるスタンスをその思想的基盤とするのが、「ヒューマニスティック体育論」(humanistic physical education)として捉えられる独自の立場である。それは人間の運動(human movement)を「science」を包み込む「art」の視点から捉え、運動経験の人間学的意味を問いつつ、それを教育論として展開するものである。S.Kleinmanの主張に倣えば、それはムーヴメントアーツ(movement arts)、ソマティック教育(somatic education)という具体的、現実的、実用的な理論として表現される。アメリカ体育哲学におけるヒューマニスティック体育論の系譜を辿る作業は、その基盤に位置するプラグマティズム思想を再評価し、現在の教育問題から体育理論と向き合うための一つの物語でもある。

井上 誠治 (inoues@kokushikan.ac.jp)

第 64 回日本体育学会

浅田学術奨励賞・受賞

記念講演

デカルト哲学を捉え直す

——〈心身の合一〉からの展望——

林 洋輔 (筑波大学・国士舘大学)

体育の場における人間の身体や心身関係の実質を問う体育哲学(原理)分野において、ルネ・デカル

ト (René Descartes 1596-1650) の思想は常に批判されるべきものとして位置づけられてきた。とりわけ彼の言及した心身関係についての議論——いわゆる〈心身二元論〉として理解されてきたもの——は、体育実践およびスポーツ活動の場における人間のとらえ方としては不適切なものであるとして、研究史上に閑却されてきたことは周知のとおりである。しかしながら、斯界ではデカルト哲学の再検討を促す指摘も往時から続けられており、近年ではデカルトの原典テキストを精読することによって彼の思想が有する現代的な意義を見極める試みも行われている。そこで今回の記念講演では直近の研究動向をふまえ、2012 年度浅田学術奨励賞・受賞論文である『体育哲学におけるデカルト心身論の原理論的考究：従来のデカルト心身論批判の再検討を通して』の内容を主な言及の対象とし、体育学の文脈においてデカルト哲学を展開することの可能性について論ずる。

具体的な内容としては、まず体育哲学（原理）分野の諸研究者がこれまでデカルト哲学における心身関係論をどのように批判しつつ議論を蓄積してきたかについて概観する。次に、デカルトの言及した〈実体の合一〉ならびに〈心身の合一〉といった心身観が体育やスポーツをめぐる議論に活かされるとすれば、それは何を根拠としてのことであるかについて上掲論文の論理に即して検討する。さらに、当論文の内容へ論駁を加えることにより、デカルト哲学を体育学において語ることの妥当性および学問的な射程についても検討する。ところで、斯学においてこれまで受容されてきた〈定説〉——デカルトの心身観に対する否定的評価——を覆す試みである当論文は、人間によって行われるさまざまな身体運動の有様に関心を抱く諸論者における心身観、ならびに人間観の再考に向けた基礎的な知見を提供しうるだろう。

林 洋輔 (qqfs3s79@bridge.ocn.ne.jp)

浅田学術奨励賞受賞報告

「浅田学術奨励賞」受賞にあたって

岡部 祐介（山口福祉文化大学）

2013 年 8 月 28 日、立命館大学びわこ・くさつキャンパスで行われました日本体育学会第 64 回大会において、「体育学研究」第 57 巻第 1 号に掲載されました論文「1960 年代における「根性」の変容に関する一考察：東京オリンピックが果たした役割に着目して」が平成 25 年度浅田学術奨励賞を受賞致しました。自身の研究課題として地道に取り組んできた成果が、体育学・スポーツ科学の人文社会領域において認められたことには大変嬉しく、また今後に向けては身の引き締まる思いであります。当該論文の執筆に際してご指導いただきました友添秀則先生（早稲田大学スポーツ科学学術院教授）に対し、まずこの場をお借りして御礼申し上げます。

本論文では、1960 年代における「根性」の変容の過程とその要因を明らかにすることを目的としておりました。これまでの研究においても「根性」は取り上げられてきましたが、高度経済成長期における社会心理として考えられ、スポーツ界では、「根性」を養成する対象として取り上げてきました。しかし、なぜこの時代に「根性」ということばの読み替えがあったのか、その必然性とは何だったのかという問いに対する明確な解答は示されてこなかったように思います。本論文では、「根性」ということばが 1960 年代初期を契機として、現在に

通じる一般的な使用へと読み替えられていったことと、スポーツ界の議論および動向との関連性を実証的に提示することはできました。しかし、忍耐や頑張りという性質だけにとどまらず、「根性がある」ということが、スポーツ界にとどまらず社会的に承認されるという価値的な広がりをもせたことの要因については、仮説的に提示されるにとどまり、より精緻な分析・考察の必要性が考えられました。

上記の課題をふまえて、今後は1960年代の高度経済成長期に成立した「根性」が、その後スポーツ場面においてどのように変容していったのか、1970年代から1990年代にいたるまで関連する事績や言説の分析によって明確化することを構想しております。現在は、スポーツ根性論が日本のスポーツ界に定着・浸透していった要因を、根性論を掲げた代表的な指導者である大松博文（だいまつひろふみ）と「東洋の魔女」（日紡貝塚女子バレーボール）を手掛かりとして明確化する課題に取り組んでおります。これらの研究課題が、究極的には広義の「スポーツ思想」研究へ接続されていくことを構想しております。

この度の浅田賞受賞にいたるまで、日本体育学会の諸先生方、特に体育・スポーツ哲学分野の先生方からたくさんのご指導、ご助言を頂くことができたからこそ、自身の研究課題に取り組み続けることができたと思います。体育・スポーツ哲学領域の発展に少しでも貢献できるように、自身の研究のみならず、当該領域のさまざまな研究課題に対して、真摯に取り組んでいきたいと考えております。

岡部 祐介 (y. okabe@hagi. ac. jp)

第64回日本体育学会に参加して

神野 周太郎(仙台大学大学院)

私が体育哲学の門をたたいたのは、数ヶ月前です。それまで、体育哲学に触れたのは学部の講義だけでした。大学院に入学して、デューイの著書に出会い、本格的に研究が始まるのですが、最初の1、2ヶ月は哲学書を読むことに慣れなければいけませんでしたが、あまりの難しさに熱を出したこともありましたが、今ではだいぶ慣れてきたので今後は熱を出す心配はないでしょう。そうして7月には箱根での合宿研究会に参加させて頂き、8月末にはこの日本体育学会に発表者として参加しました。

日本体育学会への参加は今回が初めてだったのですが、会場の立命館大学に入った時に、お祭りみたいだなあ、という印象を受けました。体育学における様々な研究領域が一度に集結する、いわば学術の祭典みたいなものと考えれば、お祭りという印象もあながち間違いではないでしょう。しかし学会初日のトップバッターで発表が控えていた私にはそのお祭り気分を十分に味わう余裕はありませんでした。1時間後、壇上に立って発表していると考えただけで嗚咽しそうでした。気が付くと、原稿を最後まで読み終え、質疑応答の時間になっていたのにはびっくりしました。そして、多くの先生方からは親身なご意見、ご質問を頂きました。その時、十分に答えられないこともありましたが、とても幸せな時間であったことは間違いありません。学問をすることができる環境に感謝すると共に、この数ヶ月でお世話になったたくさんの先生や院生の方々に、感謝の心をもって今後の研究に取り組まねばと感じました。

ところで、過去の先行研究や学術雑誌を見ていると稀に訃報という報告欄が目につきます。体育哲学領域において大いに貢献し素晴らしい研究をされた故人への追悼です。そのページを見るたびに、「何とも言えない感情」を抱くようになったのは、箱根での合宿研究会やこの日本体育学会を終えてからです。私は箱根での合宿研究会や日本体育学会で他大学の先生方

や院生にお会いしました。そこで猛烈に感じたのは体育哲学に対する先生方の熱い姿勢です。人はこれほどに生き活きと輝けるものなのだなあと心から感動しました。ご自分の研究に対する飽くなき追究心、また他の研究にも興味を示す好奇心の強さ、独りよがりにならず、お互いを高め合っていく柔軟な付き合い、なんて心地よい空間なのだろうと思いました。そして亡くなられた先人もまた、己の研究に情熱をかけていたのでしょうか。そして志半ばで逝ってしまわれた方もいたのではないのでしょうか。そういった先人の意思を汲み、その研究成果を有益な先行研究として扱い、それを基盤としてほんの少しだけでも新たに研究を前進させることは、つまり、歴史を紡いでいく、歴史の一端に貢献していくことであり、それは素晴らしいことではないのでしょうか。リレーのように意志のバトンを先人から受け取り、それを次ぎに繋ぐ、そうやって受け継がれていくものは研究成果だけではなく、眼には見えない大切な何かがあるようにも思えます。

あの「何とも言えない感情」とは、もしかしたら眼に見えない何かを私が受け取ったことによって感じたものなのかなと思えば、私のこれからの役目は少しでも体育哲学領域において貢献することです。どれだけのことが出来るかは分かりませんが、今はただ、がむしゃらにやっっていこうと、そう考えています。日本体育学会は、私をそのような気持ちにさせてくれた、とても貴重な場でありました。

神野 周太郎 (s13510211@sendai-u.ac.jp)

世界哲学会議参加報告

林 洋輔（筑波大学・国士舘大学）

5年に一度開催される〈世界哲学会 The world Congress of philosophy〉が前回2008年の韓国・ソウルに引き続いて今年はギリシア・アテネにて行われました。わが体育・スポーツ哲学分野からは畑孝幸教授（岡山大学）、関根正美教授（日本体育大学）、深澤浩洋准教授（筑波大学）、石垣健二准教授（新潟大学）の平素から国際的に活躍される諸研究者に加え、筆者も海外学会初参加としてメンバーの末席に加わることを許されました。一行は関西国際空港からトルコ・イスタンブール空港まで飛び——というのも日本からギリシアまでは直行便がないという周知の事情もあり——、さらにトルコからアテネ空港まで約1時間のフライト、そして空港から地下鉄にてアテネ市街まで移動し、そこから徒歩でようやくのことホテルへ到着。「ホテルに着くまでがひと仕事だ」と以前からお世話になっている某先生のご指摘を裏付けるような思い出深い往路となりました。

さて、8月4日から10日までアテネ大学哲学学部のキャンパスにて行われた学会では総計75ものセッションに分かれて議論が行われたほか、大学院生向けのセッション（Student Session）やテーマごとのシンポジウムが時に会場を野外にまで移して催されました。われわれ体育・スポーツ哲学の研究者はスポーツ哲学 Philosophy of sport のセッションが最終日に割り当てられたこともあり、日々関心の向かう会場にて議論に参加するとともにその合間をぬってギリシアを見聞してまわる毎日でした。筆者も毎日複数のセッションを梯子しながら議論に挑戦し貴重な教えの数々を受けるなど、今後の研究活動に対する実り多い示唆を世界の哲学者たちから与えられました。また最終日のスポーツ哲学の会場においては、スポーツ哲学界にも馴染みの深いハンス・レンク（Hans Lenk）教授が聴講に訪れるなど、盛況な議論のうちに幕を閉じました。

ところで今回の学会参加を通じて収穫した最も大きな実りは、〈哲学 philosophy〉という概念の意味内容を改めて考え直す機会をいただいたことです。というのも、たとえば上掲75の

セッションのうちには一方で「存在論 Ontology」「倫理 Ethics」あるいは「知識と認識の理論 Theories of knowledge and epistemology」など哲学関係者であれば必ず一度は耳にしたことのある分野のセッションばかりではなく、「道教の哲学 Taoist Philosophy」そして「仏教の哲学 Buddhist Philosophy」といった通例〈哲学〉というよりは〈思想〉という括りを通じて語られることもあるセッションが見受けられたからです。よく知られているように〈哲学〉とはさまざまな意味内容がその概念のうちに含まれてはいるものの、一般にはタレスからプラトン、アリストテレス以降に綿々とその系譜の連なる西洋哲学を指す事例が多く確認されます。しかし他方で〈哲学〉をその原義——フィロソフィア *philosophia*, つまり〈知を愛する〉という意味——に置きなおしてみれば、時代や空間を問わず人間が自らの生き方や認識の確実な基盤を求める営みであることを学会参加にて学びなおすこととなりました。その意味でいつもは厳しく規定することもなく口にする〈哲学〉あるいは〈思想〉といった概念とは実はどのようなことであるのかについて、この学会への参加以後に勉強しなおすよい動機づけをいただいたようにも思われました。

末筆ではありますが、議論の合間をぬって訪れた〈素顔のギリシア〉について簡略にご報告いたします。真夏のギリシアは青い空から照り付ける太陽の日差しも強く、サングラスの欠かせない日々でありました。またギリシアは観光立国として著名であるに相応しく、風光明媚な色彩の溢れる魅力的な都市であることは事前に聞き及ぶ以上のものでした。山上に位置するパルテノン神殿の後方から仰ぎ見た海の青さ。学会の開会式にて特別に入場の許された野外劇場に薫る歴史。宵闇に照らされ、時に眼をも楽しませる地中海料理。そこだけ別の時間が流れていたようにも思われたギリシア正教の礼拝式。長い直線を見下ろす石造りのスタンドが印象的な、アテネ五輪で使われたスタジアム。世界の人々を惹きつける土地の魅力は旅行ガイドで見る以上に筆者を圧倒するものでした。しかしながらその反面でアテネ大学の構内においては適切に作動しないエレベーター、締りの効かないドアなどの施設メンテナンスが十分に行き届いていない現状、さらには日々盛り場で目にするようになった物乞いなど、この国が直面する経済不況の影を暗に筆者に対して告げるものでありました。

次回の世界哲学学会は2018年、中国・北京で行われます。



〈図 1. スポーツ哲学 Philosophy of sport のセッションにて質疑に応答する筆者（左）〉

林 洋輔

(qqfs3s79@bridge.ocn.ne.jp)

IAPS2013 国際スポーツ哲学会

第 41 回大会参加報告

竹村 瑞穂（早稲田大学）

第 41 回国際スポーツ哲学学会は、2013 年 9 月 4 日から 9 月 8 日の日程でアメリカカリフォルニア

ルニア州フラトン校 (California State University , Fullerton, 以下, CSUF と示す) にて行われた. ホスト校である同校 (<http://www.fullerton.edu/>) は, カリフォルニア州フラトン市に本部を置く州立大学であり, カリフォルニア州内 12 番目の大学として, 1957 年に設置された. 2013 年 1 月までに, 217,000 人の卒業生を輩出しており, 留学生は, 79 の国と地域から集まる, 規模の大きな総合大学である.

本大会の運営に関しては, CSUF の Assistant Professor である John Gleave 氏と, Matthew Llewellyn 氏らが尽力して下さった. 実は, 筆者が John と初めて出会ったのは, 東京で国際スポーツ哲学会を開催した 2008 年のことであった. 彼は, 当時はまだ学生として参加していたが, 本大会では, 学会大会運営の中心的存在として活躍しており, 同世代の研究者仲間が活躍していることが頼もしく, またとても嬉しく感じた. また, 初めて学会をホストする John を支える形で, プログラム作成やアブストラクトの取りまとめなど, 裏方で様々な準備をしてくれたのが, アメリカの Linfield College で Associate Professor を務める, Jesus Ilundáin-Agurruza 准教授である. 彼は, 本大会の総会で国際スポーツ哲学会の次期会長に指名されるなど, IAPS の中心的存在でもある. また, 日本に対しても造形が深く, 東京や京都へたびたび訪れているという.

第 41 回大会では, 北米, 南米, ヨーロッパ, アジアなどから参加者が集まり, 演題は 100 を超えて集まった. 初日の Opening Keynote Conference では, Graham Mcfee によるレクチャーが行われ (タイトル: *Making Sense of the Philosophy of Sport*), また三日目には, William J Morgan によるレクチャー (タイトル: *Sporting knowledge and the problem of knowing how*), 最終日には, presidential address として, 国際スポーツ哲学会長の Carwyn Jones によるレクチャー (Athlete's vice: questions of moral responsibility) も行われるなど, 大変密度の濃い内容であった. さらには, イベントも用意されており, 大学内でのサッカーの試合観戦や, 学生向けのランチョンセミナーなども開催された. 一般発表に関しては, 三つないしは四つの部屋に分かれ, テーマごとに同時進行で発表が為されるという形式であった. ここで, 日本人発表者の詳細について, 下記に示したい.

○September 4th

Mizuho Takemura: '*Ethical Considerations on Gene Doping*'

○September 5th

Yoshiko Oda & Yoshitaka Kondo: '*A Dilemma involved in the internationalization of Japanese*'

Takayuki Hata & Masami Sekine: '*Athletes' mental and inner satisfaction and their solidarity in modern sport*'

Maaya Fukumoto: '*The principle of somatic learning by Thomas Hanna: the common viewpoints for decoding various bodywork systems*'

○September 6th

Junko Yamaguchi: '*Is the myth of Sisyphus still alive?*'

Ai Aramaki & Koyo Fukasawa: '*Reconceptualization of the Olympic Legacy-from perspective of the public aspect*'

Keiko Homma & Naofumi Masumoto: '*Positivist and Constructivist Approaches for Developing Sport Legacy of the Olympic*'

Takuya Sakamoto: '*Meaning of sports practitioner's "voice": Merleau-Ponty's theory of parole*'

Yoshitaka Kondo: '*Sports Coaching: Corporal Punishment and Violence*'

Fumio Takizawa: '*Introduction to the Phenomenological Theory of Human-bodily*'

今年度の IAPS は、われわれ日本人にとっても貴重な出来事が多く重なった。まずは、学会発足後、最多人数が発表（14 名）したことである。そのうち 6 名が女性の発表者で、参加国別に見ても非常に多い割合であった。参加常連者に加え、新しくこの分野に足を運んで下さった先生方や院生もおり、今後、国際スポーツ哲学会において多方面からの参加と研究成果の発表がますます期待できることは、日本の体育・スポーツ哲学分野に対しても刺激をもたらすに違いない。

さて、来年度の IAPS は、ブラジルで開催される予定である。日本の対蹠地に位置し、季節も時刻も正反対の国での開催になるが、来年度も今年度と同様、日本人研究者の活躍と存在感を肌で感じたいと思う。また、本年度と同様、大学院生による若手の活躍を、大いに期待したい。

竹村 瑞穂 (hanamizuho@aoni.waseda.jp)

運営委員会より

釜崎 太 (明治大学)

○体育哲学専門領域の HP について

HP についてお知らせいたします。現在、下記の URL にて HP を公開しております。

<http://163.43.177.95/genri/framepage5.html>

また、これに関するご意見もお寄せ下さい。

○「専門領域メーリングリストへのご登録のお願い」

メーリングリストへ登録済みの方へはメーリングリストによって会報が配信されております。速報性、経済性、「体育哲学専門領域」活性化の観点から、是非ともご登録をお願い申し上げます。次のような手順で登録できます。

- 1) グループへ参加するには、事務局 kamasaki@meiji.ac.jp までご一報ください。
- 2) 登録完了後、taiikutetsugaku@yahoogroups.jp を用いてグループメンバーにメッセージを配信することができます。

定例研究会のお知らせ

関根 正美 (日本体育大学)

平成 25 年度第 2 回定例研究会を 2013 年 12 月 7 日 (土) に下記の要領で開催いたします。

なお、研究会終了後 18 時 00 分より忘年会を予定しております。会員の皆さま、ぜひともご参加ください。現在のところ発表予定は以下の通りです。まだ余裕がありますので、さらに発表のご希望がある方は関根 (研究担当)msekine@nittai.ac.jp および釜崎 (事務局)kamasaki@meiji.ac.jp までご連絡下さい。

- ・日 時：2013 年 12 月 7 日 (土) 15:00~17:30 (予定)
- ・会 場：明治大学駿河台キャンパス リバティータワー・7 階 1075 教室
JR 中央線・総武線，東京メトロ丸ノ内線／御茶ノ水駅 下車徒歩 3 分
東京メトロ千代田線／新御茶ノ水駅 下車徒歩 5 分
都営地下鉄三田線・新宿線，東京メトロ半蔵門線／神保町駅 下車徒歩 5 分



発表内容（予定）

【発表①】 林 洋輔（筑波大学体育系/国士舘大学）身体運動と人間の幸福：デカルト哲学における〈善〉と〈習慣〉に着目して

「身体の完全性は最下等のものであるゆえ、それなしにも幸福になる手立てがある、と一般的に言うことができます。」とデカルトは或る書簡のなかで述べている。つまり<力>や<器用さ>など身体に備わる能力などなくとも主体は幸福になりうるとの言及である。そして当該の言及は直ちに次の問いを生むことになる。すなわち「スポーツ活動をはじめ身体運動を行うこと、そして身体的な諸能力を得ることは人間の幸福に対していかなる意味を有するのか」という問いである。本報告ではデカルト哲学の思想研究を方法として<至福（幸福）>や<善>、ならびに<反復>といった論点に着眼し、上の問いに回答を提出したい。

【発表②, ③】 募集中！

次号予告！

次号は研究情報などの内容でお届けする予定です。投稿を下さいます方は高橋浩二（takahashi@nagasaki-u.ac.jp）までお問い合わせ下さい。

体育哲学専門領域会報第 17 巻第 3 号

発行者 日本体育学会体育哲学専門領域
久保正秋（会長）
編集者 小林日出至郎（広報委員長）
発行日 平成 25 年 11 月 22 日
連絡先 950-2181 新潟県新潟市五十嵐 2 の町 8050
新潟大学教育学部
025-262-7075（直通）
アドレス：hinode@ed.niigata-u.ac.jp

【編集後記】

「巻頭言」における本質探究モデル、3.11.2011 の使命を任された研究者からの「原論」「原理」「哲学」の流れ、日米における内観探究の共通理解と伝達方法、第 64 回日本体育学会における実存哲学と現象学に関するキーノートレクチャー、デカルト哲学に関する浅田学術奨励受賞講演、「根性」変容過程に関する社会心理的分析の浅田学術奨励賞受賞、世界哲学会議報告、第 41 回 IAPS 国際学会報告等は、会員の希望と勇気にエネルギーを与えてくれます。箱根合宿・日本体育学会の体育哲学専門領域で、研究発表を終えた新しい研究者（S.K.）の心意気に敬意を表しつつ、皆様の益々の健勝を心からお祈り申し上げます。（K）